



Title	質問3：臨床哲学という学びの環境
Author(s)	二宮，晃紀
Citation	臨床哲学ニューズレター．2023，5，p. 53-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90070
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 2

第7回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけてられる声を聴く）

テーマ「研究者になるということ：研究者と当事者のあいだで」

質問3：臨床哲学という学びの環境

二宮 晃紀

今回のご発表及び『当事者は嘘をつく』を読んで私が率直に感じたのは、阪大の臨床哲学・倫理学の研究室で学んできたこととよく似通っているなという感想です。したがって阪大の倫理学・臨床哲学研究室にいる自分と本書という視点で2点お伺いしたいことがあります。

私は学部も阪大の倫理学研究室で過ごし、小西先生をはじめここにいらっしゃる先生方から講義を受けてきました。例えば本研究室開講の「倫理学／臨床哲学講義」の冒頭では以下の二つの目標が挙げられます。一つは西洋中心の哲学・倫理学説が目を向けてこなかった視点からなる「あたらしい倫理学」を提示することです。これは現代の道德規範や諸問題を批判的に考察するとともに、問題となる状況を生き抜くひとたちの生き方から倫理学を考えるものです。もう一つは、あることを「問題」として捉えるだけでなく、問題となる状況を生き抜くひとたちの生き方から倫理学をかんがえるということです。

まず一つ目の目標は、小松原さんが本書の最後に書かれた点と重なると思います。本文第9章には以下のようにあります。「この本が刊行されることは、新しい語りの型を、次に生き延びる人のために提供することでもある。それは、もっと自由で流動的な誰かの自己を、狭い型にはめてしまうことかもしれない。でもその窮屈な肩を破って、新しい型を生み出すサバイバーがきっと出てくる。私の語りの型は、誰かの生き延びるための道具となり、破壊され、新しい型の創造の糧になる日を待っている。」(pp.199-200) 私が倫理学・臨床哲学研究室で学んでいることはそれまでの既存の哲学・倫理学の語り方を改め、新しい語り方を考えるというものです。

また二つ目の目標はそれまで語られる側だった人の語りの中から倫理を見出すものです。小松原さんが敵としていた学者や支援者らの、被支援者の主体性を奪い、回復の言説へ集約させる態度とは対をなすものだと思います。小松原さんが語られる支援者の「わかってくれなさ」や被支援者の主体性を奪う態度について散々私たちの先生方は（しばしば周囲に白い目を向けられながらも）ボコボコに批判していらっしゃると思います。それゆえ本書で書かれていることは私にとってはある意味では当たり前のことに感じるのです。

そこで一つ目の質問です。本書第5章には「『私は性暴力被害者です。そして研究者です』そう名乗ることが当たり前で、悩みでもないような社会。それを私は待ち望んでいる。」とあります。この部分には、私が倫理学・臨床哲学研究室で学んできた、マイノリティという

語られる側からの主体的な語りという側面と、それを研究者として新たな知として位置づけてゆく側面の両義性と感じました。こうした社会のために私たち若い世代は何を身につけ、社会に対して何を働きかけることができるのでしょうか。それともここには「当事者」でありかつ「研究者」である人にしか成し得ない何かがあるのでしょうか。

もう一点は、「当事者に関わる研究」との付き合い方です。あえてこの表現をするのは、小松原さんは本書の中で「当事者研究」という言葉遣いを避けていたことを意識しています。私の学部時代に所属していた倫理学研究室では、当事者研究に関心を持ったり研究発表の際に何かの「当事者」を扱ったりする(当事者について言及する、当事者の声を引用する etc.) 学生がしばしばいます。そうした初学者が自らの研究のために当事者の声を遮ってしまったりともすれば捻じ曲げてしまったりしないように、何に気を付けていけば良いのでしょうか？

これら2点について、小松原さんの見解をお伺いしたいと思います。

(にのみや・こうき)